

# 漢墓資料研究の方向性

## 長沙地域における前漢社会をモデルとして

The New Horizon of Research Using Materials on Han Tombs :  
Using Early Han Society of the Changsha Region as a Model

上野祥史

- ① 漢墓資料研究の方向性
- ② 漢墓資料からの被葬者集団抽出のプロセス
- ③ 長沙地域の漢墓の検討
- ④ 被葬者集団の抽出と長沙前漢社会の階層構造  
おわりに

### [論文要旨]

漢墓資料から埋葬行為を復原し、行為の違いから被葬者集団を抽出し、集団間の関係およびその推移から社会動態を検討する試みは、漢墓資料への考古学的アプローチの一つの大きな課題である。漢帝国内部の社会構造を明らかにし、理解することは、周辺の東アジア諸地域の動向を考える上でも重要である。本稿では、その具体的な分析の一つとして、前漢期の長沙地域に着目して検討をおこなった。埋葬主体部の規模と構造、副葬品組成など、漢墓資料の諸属性を多角的に検討し、埋葬行為（パターン）を復原して被葬者集団を抽出した。その結果、前漢前期、後期ともに、4つの階層を見出すことができた。この4つの階層は、前漢前期と後期でおおよその対応がつくこと、後期には階層内において多様化することが判明し、後期の墓群の構成状況から前漢後期の長沙地域における社会構造を推察することができた。本研究を通して、漢墓資料からの漢代社会の社会構造へのアプローチの橋頭堡を築くことができたと思う。

## ①……………漢墓資料研究の方向性

漢墓には「ゆたか」という形容こそふさわしい。墓構造・副葬品・装飾などの漢墓の諸要素はいずれも具象性に富んで表現豊かであり、政治・経済・社会・工芸技術・思想・宗教さまざまな方面の研究において重要な資料である。漢墓資料と文献資料を総合して検討した、これら各方面における研究は、大いに進展してきた。

筆者は、漢墓資料に見出されるさまざまな行為からさまざまな集団間の関係を考察し、そこに社会の動態をよみとくことを、漢墓資料への考古学的アプローチの一つの大きな課題であると考えている。漢墓資料を分類し序列することで、その変遷から社会の動向を検討した研究は、これまでに数多く見られる。これらが新しい知見や認識をもたらし、大きな成果をあげていることは言うまでもない。しかし、漢墓資料の同時代的な多様性に言及しながらも時間的前後関係の整理に主眼を置いた研究が多く、単系列的な変化を軸に論が展開されることが多い。そこに描き出される社会の変化は動的なものではなく、時期ごとの相を整理した静的な感を受けるものが多い。漢墓資料の背後にみえるさまざまな集団が時間とともにどう変容し、その集団間の関係がどう変化したのか、検討されることは少なかった。それはやはり、漢墓資料のゆたかな具象性と、文献資料が豊富であるという時代的な背景によるところが大きい。漢墓を分類して被葬者集団を整理し、社会階層の形成と変容を検討する方向は、より一般的な社会集団把握の一つである。墓葬の規模・構造は、被葬者集団を検討し社会階層を考える上でより有効な要素であるが、これまで大型墓・中型墓・小型墓を明確に定義した上で議論が進むことは少なかった<sup>(1)</sup>。また、個別の墓葬に対して、文献にみられる官秩・官職・等爵といった角度から解釈がなされ、社会階層や集団間関係が議論されることがある。対象とした墓葬の漢墓における位置付けがなされることなく、これらの身分秩序・社会階層の代表例として扱うきらいがある。被葬者集団の関係性はこれら身分秩序のみで理解できるものではない。漢墓資料とそこに見出される埋葬行為の違いから、まずさまざまな被葬者集団を抽出することが、必要である。ある被葬者集団のうちに、身分秩序・社会階層などを明示する例があれば、その被葬者集団をその階層に帰してゆくような方法で検討を進めなければならない。

これまでに、漢墓資料から埋葬行為を検討し、埋葬行為の違いから諸集団を抽出して、その集団間の関係性がどのように変容するか検討した研究としては、町田章による洛陽地域の中小墓の検討[町田1968]、高久健二による楽浪地域の漢墓の検討[高久1994]、山下志保による画像石墓の検討[山下1991a,b]をあげることができる。町田は、漢の河南县城の城外に広がる焼溝と金谷園の二つの墓群を対象として、両者で副葬品組合せが異なることに着目し、焼溝の被葬者を「戦国時代以降ひきつづき生活しているにもかかわらず、西漢中期まで陽の目をみなかった土着勢力」に、金谷園の被葬者を「前漢になってこの地に移住しその当初から官人として出発した勢力」に比定した。そして、この集団間の違いも前漢後期から前漢末にかけて、解消されてゆくことも指摘している。中小墓としてくられる墓葬ではあるが、副葬品組合せによって異なる二つの被葬者集団を抽出し、その両者の関係性から河南县城社会の変動を描いた研究は大いに評価される。高久健二は、楽浪漢墓における被葬者集団を抽出し、各集団における埋葬行為の違い・その変容と相互の関係性から、楽

浪地域における社会の変動を見事に描き出している。ここでは、ABCという3つのランクにおいて、どのような埋葬行為が存在したのか、またそれが時代とともにどのように変容したのか、上位の階層はどのような埋葬行為を排出・現出することで階層的な優位性を保とうとしたのか、また下位の階層は上位を志向する中で、上位の階層に保有される埋葬行為に対してどのような埋葬行為を現出したのか、あるいは、外来の情報・埋葬行為に対してこれらの階層はどのように対応し、結果としてどのようにその階層間の関係性は変容していったのか、検討している。よりダイナミックに楽浪社会の変動が描かれており、これまでになかった研究であるということができよう。山下志保は、画像石墓を分類した上で墓主の身分を推察し、画像石墓という特殊な墓が出現する社会背景を検討した。墓主はほとんどが品秩を有し、身分によって規模や画像内容に差があり、ステータスの差が明確であるであることを指摘した。画像石墓の分布と変遷から、画像石墓は劉氏一族との関連がある地域に多く、画像石墓の拡散・展開は後漢劉氏一族、あるいは劉氏に従って南陽より来した官僚の派遣が背景となっていることを指摘した。これまでの、画像石墓の研究では、大型墓に対する個別の検討や、凶像学、もしくは文化史的な立場からの伝播・拡散論は存在していたが、このような社会階層を視野に入れた検討は少なく、画像石墓研究のなかでも注目すべき研究であるということができよう。

このように、漢墓資料から埋葬行為を検討して、その違いから被葬者集団や被葬者集団間の関係に言及した研究は数少ないものの、いずれも対象とした時代・地域における社会の変動をダイナミックに描き出しており、大いに評価されるべきものである。しかし、洛陽地域の中小墓、楽浪地域、画像石墓など、それは漢墓全体の資料からすれば、極めて限定された一部分に過ぎない。

これまでも述べてきたように、筆者は、漢墓資料から埋葬行為を復原して行為の背景にある被葬者集団を抽出し、その集団間関係を検討することによって漢代社会の動態を描き出すことに、漢墓資料研究の方向性を求めている。漢帝国内部の社会構造を明らかにし理解することは、周辺のアジア諸地域の動向を考える上でも重要である。これまでに、いくつかの地域を対象として分析を進めているが、その一つとして長沙国に着目している。今回は、その長沙国における漢墓資料検討の第一歩として、まず長沙地域の状況を検討することを目的としたい。

本稿では、前漢時代の長沙地域を対象とする。この地域では、出土する印章や封泥などから被葬者が王族である可能性が高い規模の巨大な墓葬から、副葬品をほとんどもたない規模の小さな墓葬まで、さまざまな規模の墓葬が報告されており、かつ墓群資料の報告も豊富である。被葬者集団を抽出するには、比較的条件的揃った地域であるといえよう。また、この地域では、前漢から王莽期に至るまで、埋葬主体部は<sup>(4)</sup>堅穴系の木質構造が継続する。他地域では、前漢中期を境に洞室墓や空心磚墓、磚室墓が登場し、埋葬主体部は構造や材質の面で大きな変換点を迎える[町田1977, 黄2000]。当地域でも木質構築材を用いた室構造が現出するが、従来と同じく構築材に木材を求めている点では、中原の諸地域とは異なる。中原の諸地域では洞室墓や磚室墓が導入され普及するのにもなってその平面プランが複雑化するのに対して、当地域では、基本的に方形もしくは長方形の堅穴墓壙に木質構造の埋葬主体部を構築している。前漢の墓葬については、前漢前期であれ後期であれ、埋葬主体部の平面プランの比較が容易である。ただ、この地域においても、後漢以後は磚室墓が普及し、木質構造墓は姿を消すことになる。そこで、前漢を検討の対象にしたのである。

## ②……………漢墓資料からの被葬者集団抽出のプロセス

分析では、単独で報告される墓葬と墓群の資料をともに扱った。単独で報告される墓葬の場合には、埋葬主体部の図面が明示されているもののみを用い、墓群の場合には、一覧表などで埋葬主体部の規模や副葬品の組合せが明瞭なもののみを用いた。編年や階層問題をはじめとして、はじめさまざまな分野で定点とされてきた墓葬、すなわち詳細な情報を有する墓葬についても、分析では他の墓葬と同じ扱いとする。それは、どの墓葬についても相対的な関係性の中でひとしく評価できることを可能にする為である。

これらの資料に基づいて、まず埋葬主体部の規模と構造を検討して、まとまりを見出す。その後、副葬品の組合せや特定の副葬品の有無など、副葬状況から、まとまり相互の関係性を検討し、まとまりから被葬者集団を抽出する。被葬者集団に被葬者の官職・身分秩序などを明示した社会的階層が明確な墓葬がある場合には、改めて被葬者集団をどのような社会集団として帰すべきなのかを検討したい。このような方法に従って、分析を進めてゆくことにする。

分析に入るに前に、埋葬主体部の規模の比較基準、年代など、前提を必要とするものについて、以下で説明をおこなうこととする。

埋葬主体部の規模を示すものとしては墓壇と埋葬主体部の規模があるが、埋葬主体部構造の木質構築材が遺存する例が極めて稀であることから、墓壇を以って埋葬主体部の規模を検討した。対象とした時代、この地域においては、埋葬主体部構造は墓壇と相似形の方形もしくは長方形の平面プランをとることが多く、墓壇の規模の比較は、埋葬主体部の規模の比較を意味することとなる。一部の墓葬には、墓壇もしくは埋葬主体部が長方形や方形ではないものが存在するが、これは磚室墓などにおいて耳室が主室に匹敵するほどに著しく巨大化するようなものではなく、長方形もしくは方形の範疇でとらえてよいものと思われる。埋葬主体部の規模、すなわち墓壇の規模は、長軸と短軸の長さを以って示すことにする。なお、その数値については、基本的に報告書に記載されている数値を利用した。

また、今回の分析では、埋葬主体部の構造よりも規模を分類基準として優先させた。まず埋葬主体部の構造の分類をおこない、その分類と埋葬主体部の規模との相関関係を検討するのが一般的である。しかし、漢墓の報告ではすべての埋葬主体部の図面が掲載されているわけではなく、報告書に掲載された埋葬主体部の代表型式を集成して新たな型式分類をおこなっても、平面図が掲載されていない大半の埋葬主体部は新たな型式分類<sup>(5)</sup>のもとでの位置付は不可能である。それに、一地域に注目した検討では、検討に供される資料は極めて少なくなる。幸い、前漢の長沙地域においては、埋葬主体部は方形もしくは長方形の墓壇を基本としており、長軸と短軸を組合せた数値による比較が可能である。埋葬主体部構造の遺存が良好な例は少ないが、副葬品の配置状況から埋葬主体部における空間構成をある程度復原することはできる。特に、棺埋葬空間と副葬品配置空間の関係性に注目して、構造を検討したい。そこで、まず、長軸（長さ）と短軸（幅）に注目した分類をおこない、その分類と埋葬主体部構造との関係を検討する順で分析を進めることにした。この方法によって、より多くの資料に基づいた検討が可能になると考えられる。

本稿では、被葬者の抽出過程で、埋葬主体部の分析を副葬品の分析よりも優先させた。これは、埋葬主体部に違いがある場合と、副葬品に違いがある場合では、埋葬主体部に違いがあるほうが、その準備により労力財力を必要としたと考えられるからである。

編年・年代については、前漢前期と後期の二期区分を採用した。副葬品などの型式学的分析に基づいて編年作業を行い、その上で被葬者集団の抽出をおこなうのが望ましい。しかし、埋葬主体部構造の項でも触れたが、数十、百数十基に及ぶ墓群資料の場合、報告書には代表型式のみが表示されるだけである。これらを集成し新たに型式分類をおこなっても、その分類に基づいた図面のない個々の埋葬主体部構造や副葬品を新たな分類のもとで位置付けることは不可能である。墓葬の編年・年代は、報告書の記載に従った。大きくは、五銖銭の出現を指標とする前漢前期と後期の二期区分が一般的である。<sup>(6)</sup> 墓葬によっては、呂后期、文帝期、景帝期から武帝期、武帝期、昭・宣帝期など、詳細な年代決定が行われている例もあるが、個々の墓葬についてすべてこのような詳細な年代を比定することは難しい。そこで、本稿ではそれぞれの報告に従い、墓葬を前漢前期と後期に帰して分析を進めることとする。

### ③……………長沙地域の漢墓の検討

ここ長沙地域では、解放以前から墓葬の存在が知られていたが、解放後に調査された墓葬は相当数に及ぶ。前章で示した基準を満たし今回分析に用いた資料は、下記のとおりである。

#### 検討対象墓葬

湘江西岸 単独 象鼻嘴1号墓 陡壁山1号墓  
 墓群 桐梓坡 銀盤嶺 茶子山  
 湘江東岸 単独 馬王堆1・2・3号墓 砂子塘1・2号墓  
 湯家嶺1号墓 湯家嶺304号墓  
 墓群 陳家大山 伍家嶺 識字嶺 楊家大山

漢代長沙国の都である臨湘城は現在の長沙の市街地であり、湘江東岸に位置する。漢代の墓葬は、湘江西岸地域にも東岸地域にも存在する。湘江西岸地域はかつての都城の対岸、湘江東岸地域はその郊外ということになる。従来の研究では、湘江の西岸地域と東岸地域では、墓葬の造営年代が異なることが指摘されているが[宋1985]、西岸・東岸を区別せずに分析を進める。全体として長沙地域の墓葬を整理し、その結果西岸と東岸で違いがみられれば、改めてその際に検討することにした。

#### 1) 墓葬の規模と埋葬主体部構造

##### 前漢前期 (図1-1, 2, 図3)

まず、埋葬主体部の規模についてみてみよう(図1-1)。長軸5m短軸4mを境にして、規模が小さく密集する一群と、規模が大きく分布がまばらなものに分けることができる。長軸5m短軸4m以上では、長軸が10mを超える、並外れて規模の大きいものとそうではないものに分けることできる。

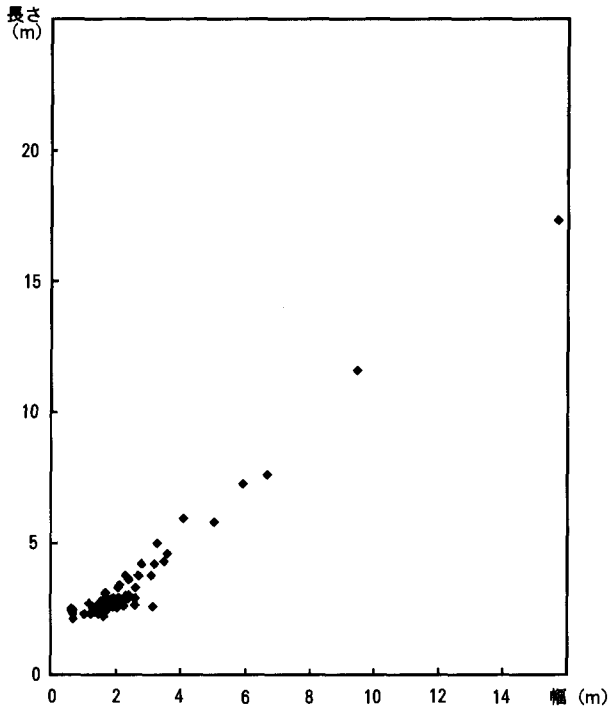


図 1-1 前漢前期の埋葬主体部の規模 (1)

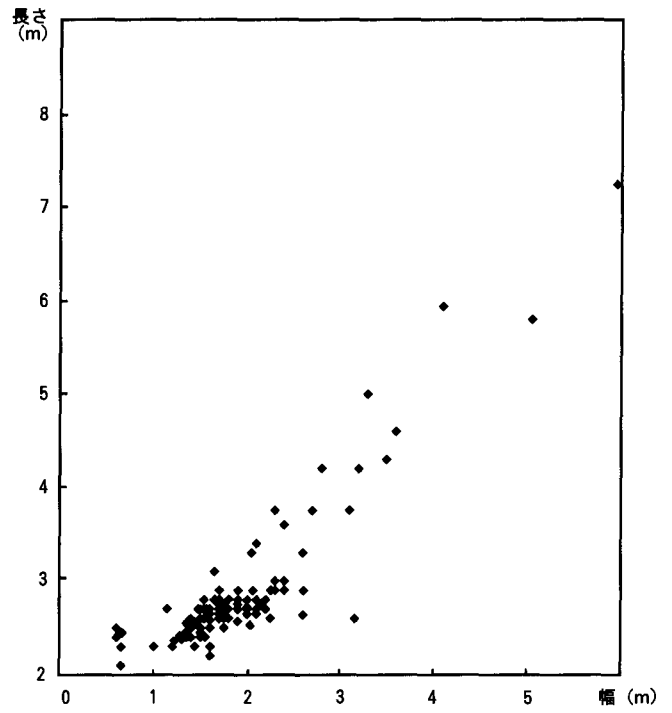


図 1-2 前漢前期の埋葬主体部の規模 (2)

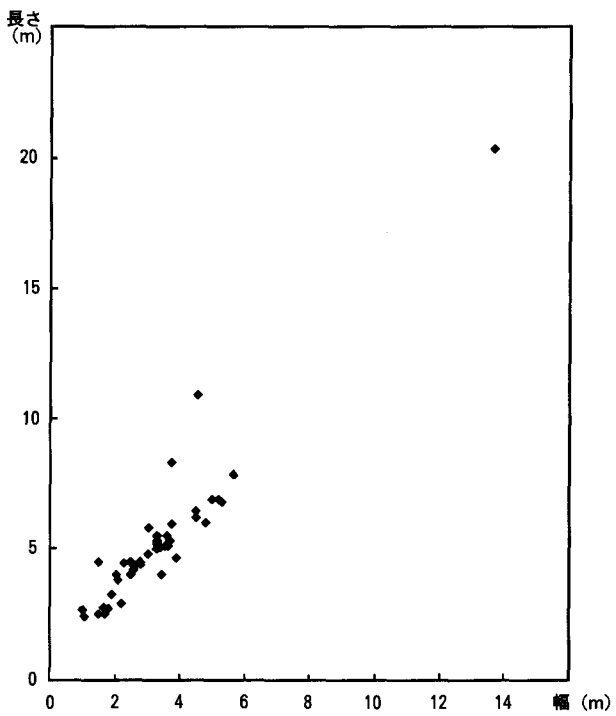


図 2-1 前漢後期の埋葬主体部の規模 (1)

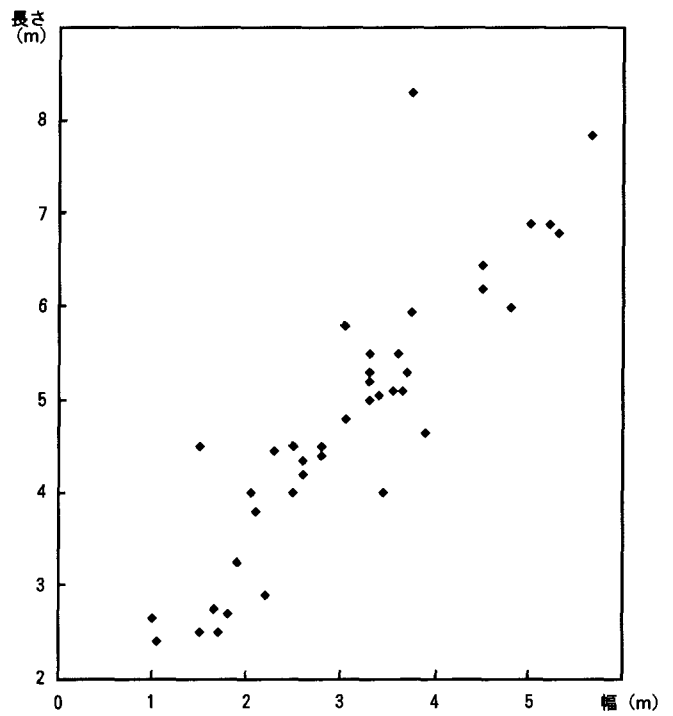
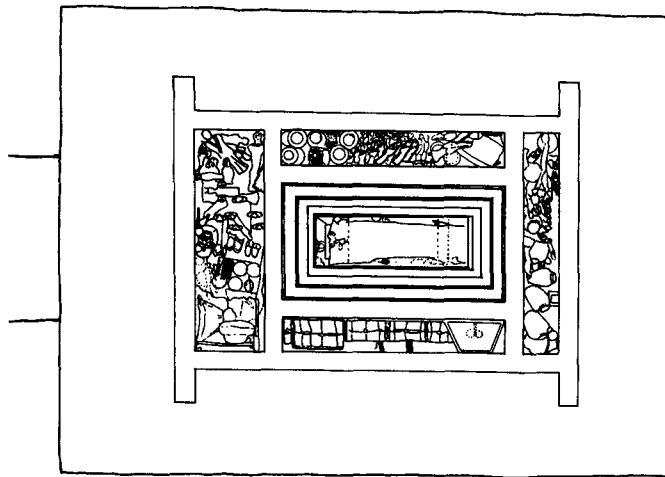
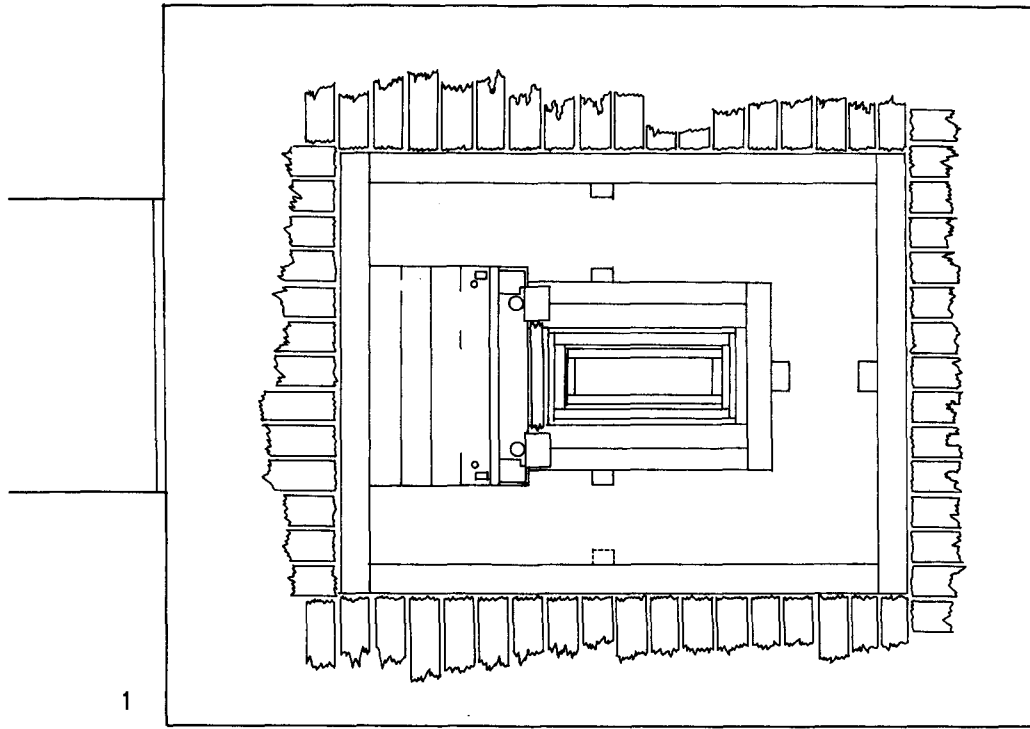


図 2-2 前漢後期の埋葬主体部の規模 (2)



1. 陡壁山 1号墓
2. 馬王堆 1号墓
3. 楊家大山 402号墓
4. 桐梓坡 47号墓
5. 識字嶺 341号墓
6. 桐梓坡 50号墓
7. 桐梓坡 32号墓

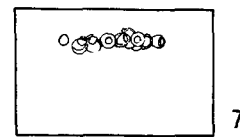
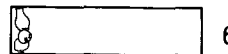
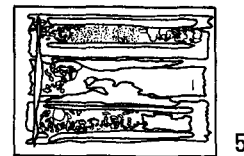
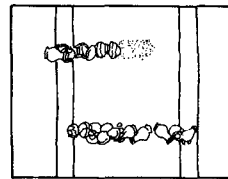
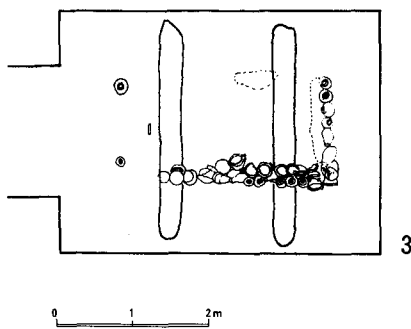


図3 前漢前期の埋葬主体部の構造

前者を埋葬主体部A、後者を埋葬主体部Bと呼ぶことにする。そして、長軸5m短軸4m以下の規模が小さく密集する一群を埋葬主体部Cと呼ぶことにする。埋葬主体部Cでは(図1-2)、長軸3mを境として2つの群に分けることができる。長軸は3~5m、短軸は2~4mの範囲にある規模のやや優位な一群と、長軸3m以下で短軸が0.6~2.6mの範囲にある一群である。前者を埋葬主体部C1、後者を埋葬主体部C2と呼ぶことにする。

次に、規模ごとに分けたこの4つの埋葬主体部について、それぞれの構造を検討することにしよう(図2)。

埋葬主体部Aでは、象鼻嘴1号墓と陡壁山1号墓(図3-1)はともに、木質の角材を小口積みした外護施設をもつ埋葬主体部構造である。これは、文献に記載された「黄腸題湊」であると考えられている。象鼻嘴1号墓は室構造であり、陡壁山1号墓は槨構造であることが指摘されている<sup>(7)</sup>。しかし、陡壁山1号墓は、棺埋葬空間の四方を均質な副葬品配置空間が取り囲むのではなく、前方の副葬品配置空間が他とは異なり、玄門が付設されるなど、構造上は象鼻嘴1号墓に共通する。黄腸題湊に比定される外護施設、具象性ある門構造の現出、前方の副葬品配置空間の特殊化などは、両者に共通するものの、後述の埋葬主体部ではみられない。

埋葬主体部Bでは、馬王堆1号墓(図3-2)、同3号墓、砂子塘1号墓ともに、いずれも埋葬主体部は槨構造であり、構造的には均質な4つの副葬品配置空間が棺埋葬空間を取り囲んでいる。砂子塘1号墓では、この他に、副葬品配置空間として東西の耳室が埋葬主体部から伸びる斜坡墓道の両側に付帯している。

埋葬主体部Cでは、埋葬主体部の構築材が遺存する例はほとんどない。現在のところ、識字嶺341号墓(図3-5)で槨構造が確認されるのみである。しかし、いずれの墓葬でも副葬品が細長く線状に並んだ状況が検出されていることから、埋葬主体部は個々の副葬品配置空間が狭小な槨構造であったと考えられる。埋葬主体部C1では、楊家大山402号墓(図3-3)において、棺埋葬空間の片側と足側に副葬品配置空間があるという構造が確認されているのみである<sup>(8)</sup>。より規模の小さい埋葬主体部C2では、副葬品配置からみて、①棺埋葬区間の両側に副葬品配置空間があるもの、②棺埋葬空間の片側のみに副葬品配置空間があるもの、③棺埋葬空間の頭側もしくは足側に副葬品配置空間があるもの、のいずれかである。桐梓坡47号墓(図3-4)や茶子山2号墓のように、①棺埋葬区間の両側に副葬品配置空間があるものは埋葬主体部の規模が大きく、逆に桐梓坡41号墓や同50号墓(図3-6)のように、③棺埋葬空間の頭側もしくは足側に副葬品配置空間があるものは埋葬主体部の規模が小さい。

これをふまえて、埋葬主体部AからC2まで各埋葬主体部の関係性をみてみよう(図7)。まず、埋葬主体部Aには黄腸題湊に比定される外護施設があり、具象性ある門構造が現出している。副葬品配置空間も前方の副葬品配置空間が特殊化するなど、各空間が均質ではない。これに対して、埋葬主体部BからC2までの埋葬主体部では、副葬品配置空間の数は異なるものの、埋葬主体部内において副葬品配置空間は構造的に均質である。これらの埋葬主体部では、規模に応じて副葬品配置空間が減少するようである。埋葬主体部BからC2までは構造的に共通するが、埋葬主体部Aとは構造的に相違点がみられる。前漢前期には、規模の大小によりA→B→C1→C2と序列される4つの埋葬主体部を確認することができた(図7)。



### 前漢後期 (図 2-1, 2 図 4, 5, 6)

埋葬主体部の規模から検討しよう (図 2-1)。まず目につくのが、飛び抜けて大きな埋葬主体部の存在であるが、これを埋葬主体部 A とする。次に、長軸が 8 m を越える 2 例を埋葬主体部 B とする。これらは、図 3-1 においてある幅のライン上に並ぶ他の埋葬主体部とは異なる。図 3-1 においてある幅のライン上に並ぶ大多数の埋葬主体部も、いくつかのグループに分けることができる (図 2-2)。

①長軸が 5.5~7 m で短軸が 4.5~6 m, ②長軸が 4.5~6 m で短軸が 3~4.5 m, ③長軸が 3.5~5 m で短軸が 2~3 m, ④長軸が 2~3.5 m で短軸が 1~2.5 m, の 4 つのグループである。これらを、それぞれ埋葬主体部 C・D・E・F とする。興味深いのは、これらの分布範囲が、おおよそではあるが前漢前期の各埋葬主体部の分布に重なることである (図 1-2, 2-2)。前漢前期には長軸 6 m 短軸 4 m を区切りとして埋葬主体部 B と C に分けることができたが、該期にもここを境に埋葬主体部 C と D が分かれる。前漢前期の埋葬主体部 B と該期の埋葬主体部 C とは分布範囲がほぼ重なる。該期の埋葬主体部 E は、分布の中心は若干ずれるが、分布範囲が前漢前期の埋葬主体部 C1 とほぼ同じである。該期の埋葬主体部 F も、分布範囲が前漢前期の埋葬主体部 C2 と重なる。前漢後期には、大型のもの、前漢前期の諸グループと分布の重なるものなど、合計 6 つの埋葬主体部を見出すことができる。

次にこれら 6 つの埋葬主体部の構造をみてゆこう。埋葬主体部 A・B・C・D では、墓壇壁や壁面近くの墓壇底に柱穴がみられ、上部構造を支えた木質の柱があったことを示す例が少なくない (図 5-2, 3, 4)。それに副葬品の出土状況も、前漢前期には線状に細長く並ぶ状態が検出されたのに対して、該期では副葬品は面的な広がりをもって検出される。これらの状況から、該期には各墓葬で埋葬主体部内の空間が拡大し、いずれの埋葬主体部も室構造であったことが推測される。

埋葬主体部 A の楊家大山 401 号墓 (図 4-2) では、棺埋葬空間の前方に、左右両側に副葬品配置空間がある。埋葬主体部 B の伍家嶺 203 号墓 (図 4-1) は、棺埋葬空間の前方に、宴飲具を安置する副葬品配置空間が存在し、そのさらに前方下部に車馬・船などの明器を埋納する副葬品配置空間が存在する。これらの埋葬主体部では、棺埋葬空間が最後方にあり、その前方に副葬品配置空間が位置するという空間構成をとっており、棺埋葬空間に対して副葬品配置空間は直線配列される関係にある。

埋葬主体部 C では、墓壇が近正方形の形状を呈するものが多い。湯家嶺 1 号墓 (図 5-1) でも、伍家嶺 211 号墓、218 号墓 (図 5-2, 3) でも、棺埋葬空間が埋葬主体部の後方中央にある。その側方には副葬品配置空間があり、その前方には副葬品の数は少ないものの副葬品配置空間がある。棺側方の副葬品配置空間は、両側に存在することもあれば、片側だけのこともある。ここでは、棺埋葬空間を取り囲むように副葬品配置空間が配列される。棺埋葬空間に対して、副葬品配置空間は圍繞配列される関係にある。また、一部の墓葬では、墓道の一部で墓壇に接続する部分に一種の前室のような墓道から独立したような空間がある。いずれの墓葬も棺の大きさに比して埋葬主体部構造がより巨大である点も、この一群の特徴としてあげることができよう。

埋葬主体部 D では、墓壇が長方形を呈する。伍家嶺 212 号墓と識字嶺 327 号墓 (図 5-4) が確認できるが、ともに棺埋葬空間は埋葬主体部の後方左側に存在する。その側方には副葬品配置空間が存在し、その前方には棺埋葬空間とほぼ同程度の長さの空間が存在する。埋葬主体部 C と同じく、

ここには副葬品の数はそれほど多くないが、何らかの意味をもつ副葬品配置空間であったと認識してよいであろう。この埋葬主体部においては、棺埋葬空間に対して副葬品配置空間を圍繞配列する形で、空間構成がなされる。また、この一群でも、墓道の一部で墓壙に接続する部分が一種の前室のような空間として、墓道から独立した様相を呈する。この空間の底面は墓壙底にほぼ等しく、墓道とは区別されるべき何らかの空間であった可能性を指摘できる。副葬品配置空間の圍繞配列と、墓道の前室様空間が存在するという2点は、埋葬主体部Cと共通する。ただし、両者では墓壙の形状が異なる。

埋葬主体部Eでは、埋葬主体部構造の異なる例を2件確認できる。伍家嶺214号墓(図5-5)では、埋葬主体部後方右側に副葬品が集中しており、その前方に副葬品の件数は乏しいものの副葬品配置空間がある。棺埋葬空間は埋葬主体部後方左側であったと考えられる。埋葬主体部における空間構成は、ほぼ埋葬主体部CやDと共通する。もう一例の、砂子塘2号墓(図5-6)では、埋葬主体部は前段と後段で若干幅が異なり、前後に分けられる。棺の埋葬空間と想定されるのは埋葬主体部の後段で、埋葬主体部の前段には副葬品が密集する副葬品配置空間がある。また、棺埋葬空間後

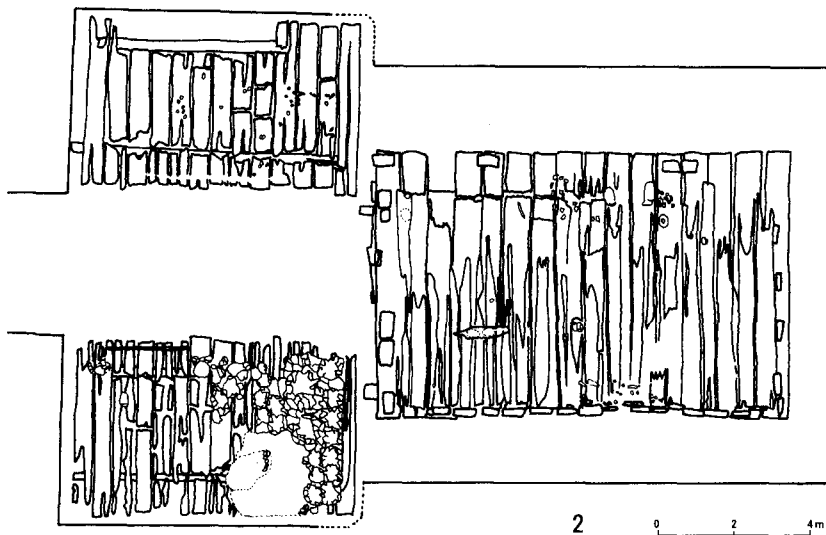
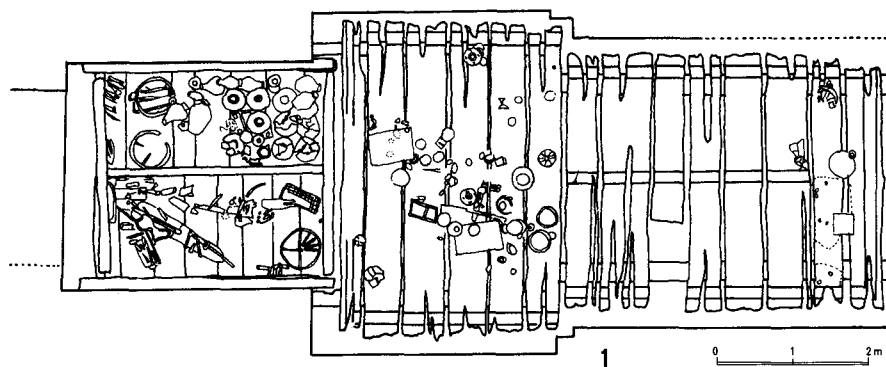
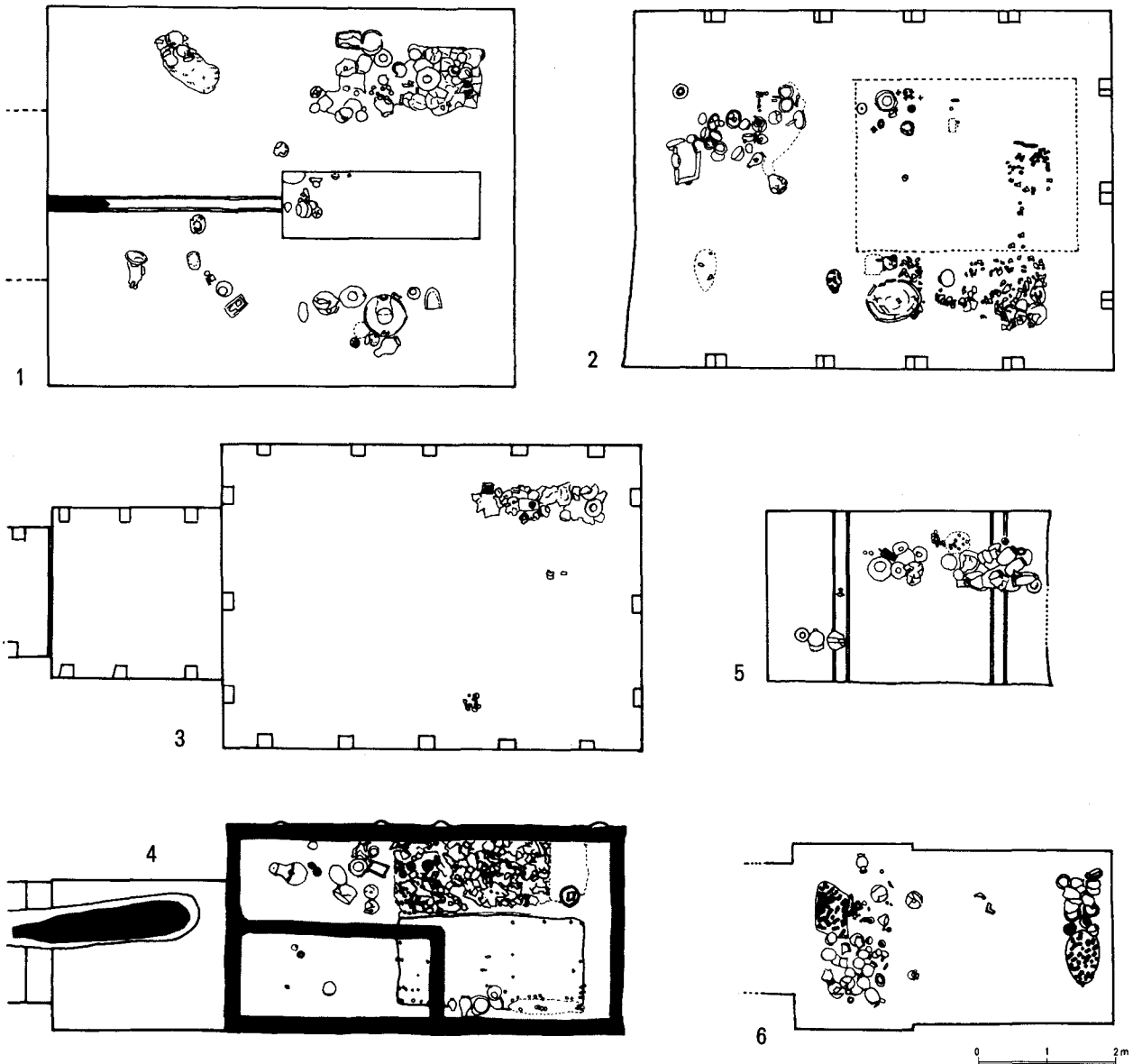


図4 前漢後期の埋葬主体部の構造(1)

1. 伍家嶺203号墓
2. 楊家大山401号墓



- |               |               |
|---------------|---------------|
| 1. 湯家嶺 1 号墓   | 2. 伍家嶺 211 号墓 |
| 3. 伍家嶺 218 号墓 | 4. 識字嶺 327 号墓 |
| 5. 伍家嶺 214 号墓 | 6. 砂子塘 2 号墓   |

図5 前漢後期の埋葬主体部の構造 (2) \* 黒塗りは配石遺構

方にも副葬品の密集する部分があるが、棺側方には副葬品配置空間はみられない。棺埋葬空間の前後に副葬品配置空間が存在する、副葬品配置空間の直線配列は、埋葬主体部A・Bと共通する。棺埋葬空間と副葬品配置空間の幅が若干異なり、墓壙全体がややT字形を呈するのも、埋葬主体部A・Bと共通する。埋葬主体部Eでは、埋葬主体部C・Dと空間構成が共通するものと、埋葬主体部A・Bと空間構成が共通するものの、両者がみられる。

埋葬主体部Fでは、今のところ公表された図面が存在せず現状ではどのような構造をとっているのか、判断することはできない。

各埋葬主体部についてそれぞれその構造を検討してきたが、現段階で構造がわからない埋葬主体部F以外では、共通する理念と、規模に応じた空間構成の違いをみることができる。副葬品は面的な広がりをもって検出される。その埋葬主体部は、前漢前期までの槨構造とは明らかに異なる空間を意識した構造であったといえることができる。副葬品の面的な検出状況はいずれの墓葬でもみられ、「空間の意識」は当地域の前漢後期に共通する理念であったといえよう。しかし、それを如何に現出するかという点においては、2タイプの空間構成が存在した。副葬品配置空間を直線配列する埋葬主体部A・Bと、副葬品配置空間を圍繞配列する埋葬主体部C・Dである。規模は前者が大きく、前漢後期には規模の優劣によって擁する空間構成が異なっていたことがうかがえる。また、埋葬主体部C・Dが、前漢前期の埋葬主体部B以下の槨構造の副葬品配置空間を拡充させることで現出したと考えられるのに対して、A・Bは前漢前期の当地域での埋葬主体部との関係はとらえられず、その系譜も異なる可能性が高い。埋葬主体部Eには、埋葬主体部A・Bの空間構成を略したものと、埋葬主体部のC・Dの空間構成を縮小したものがみられた。このことから、埋葬主体部Eは独自の空間構成を用いるのではなく、埋葬主体部A・Bと埋葬主体部C・Dの空間構成を取捨選択しつつ、縮小することで造営した一群であると推測することができよう。

前漢後期においては、埋葬主体部の規模に応じて、空間構成が異なり、あわせて特徴ある墓道の有無などの違いもみられた。埋葬主体部の規模と構造が対応する状況を確認することができた。

以上、規模と構造から前漢前期には4つの埋葬主体部を、前漢後期には6つの埋葬主体部を見出すことができた。時期ごとの規模による序列と空間構成の違い、前期と後期の関係性を示したのが図7である。

## 2) 副葬品組成

次に、規模と構造から見出された埋葬主体部ごとに、その副葬品の構成状況を検討することにしよう。ここで検討した副葬品は、墓葬によって副葬の有無がわかるもの、あるいはいずれの墓葬でも副葬されるが件数に多寡があるもの、のいずれかである。主に検討したのは、漆器、陶鼎、壁、鏡、印章、鉄製利器、青銅器である。

### 前漢前期 (表1, 2, 図6-1, 2, 3)

まず、埋葬主体部ごと副葬の有無が分かれるものから検討しよう。

漆器は、埋葬主体部AやBの墓葬では、耳杯・盤をはじめ多様な器種で構成される膨大な量の漆器が副葬されている(右頁上参照)。しかし、埋葬主体部Cでは、漆器の表皮や付属品が出土することはあっても、一定量の漆器の副葬を示す痕跡はない。漆器の副葬をめぐるのは、埋葬主体部A・BとC1・C2の間には大きな隔りがあることがうかがえる。

陶鼎は、基本的にどの埋葬主体部でも副葬される(表1)。陶鼎は、盆・壺とともに戦国楚墓に副葬されていた陶製礼器の一つである。鼎は身分に応じてその多寡が決められていた。西周の用鼎制

漆器の大量副葬例

象鼻嘴1号墓	盗	盒1 方壺1 円盤3 盤(残) 卮(残) その他残件
陡壁山1号墓	盗	盤55 耳杯52 案・匱・几・枕・扁壺・琴瑟など 器形判明は150余
馬王堆1号墓	-	鼎7・鈇4・鍾2・盒4・匕6・卮7・勺2・耳杯90・耳杯盒1・盤32・盂6・案2・匱2 奩3・几1
砂子塘1号墓	盗	耳杯(残)4・耳杯盒(残)・盒・案 多子奩盒1・几1・耳杯90-100・匱1・盤20・漆盒8・奩4

度をその起源に持つが、その内容は時代とともに変遷し形を変えながらも、葬礼のみならず儀式等の生活の場面において用いられるべき器種数量が決められており、鼎の多寡は身分表象であった[兪1985]。少なくとも、馬王堆1号墓の鼎の副葬は、用鼎制度に則った可能性があるようである[兪1981]。表1では、埋葬主体部別に、副葬される陶鼎の数と墓葬の件数を示した。埋葬主体部A・Bでは、陶鼎の副葬はいずれも6件以上である。埋葬主体部Aの陡壁山1号墓では復原件数で25件が出土する。埋葬主体部Bの馬王堆1号墓では陶鼎は6件と少ないものの、他に漆鼎が7件副葬されるなど、かなりの数量

表1 前漢前期における陶鼎の副葬状況

埋	陶鼎									
	>9	9	8	6	5	4	3	2	1	0
A	1●									1●
B		1●	1●	1						1
C1		2	1			3●		1	2●	2●●
C2				5	1	16	13●	43●●●●	14●	6●●●

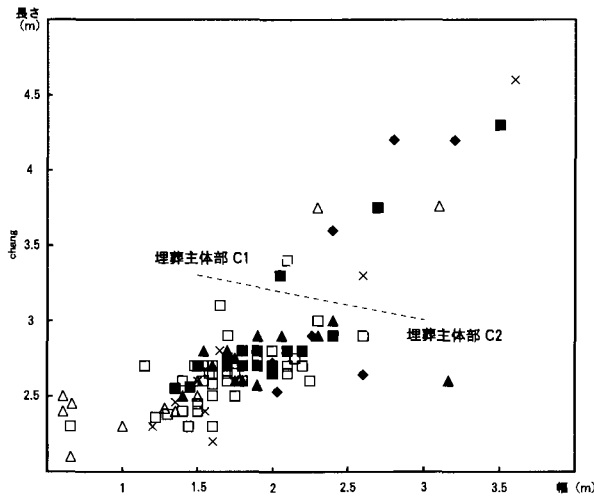
枠右下の●で盗掘を受けた墓葬数を示した(表2も同じ)

表2 前漢前期における壁・鏡の副葬状況

埋	壁					鏡	書刀	総数
	玉	玻	石	陶	木			
A	2●●		1●			1●	1●	2●●
B	2●●				2	3●	2	4●●
C1	3●		4●	1		4●	1	11●●●●
C2		2	8●	2●		16●●●●	7	98●●●●●●●●●●

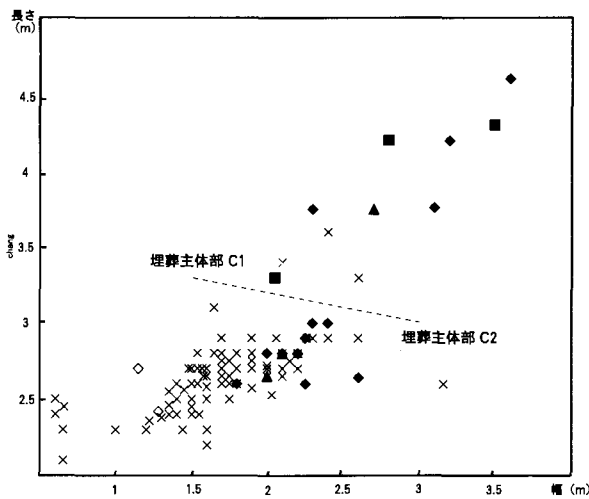
の鼎が副葬されていた。埋葬主体部A・Bに6件以下の例がないこと、陶製以外にも漆製の鼎が副葬されていることから、鼎の副葬からも埋葬主体部A・BとCの間には、隔たりがあることを確認できる。埋葬主体部C1とC2では、前者が後者よりも優位である。9件や4件を中心とする前者に対して、後者では2件を中心としてほとんどが4件から1件である。埋葬主体部C1とC2に関して、その規模ごとに陶鼎の件数を示したのが図6-1である。埋葬主体部C2においては、規模の大きな墓葬では4鼎・3鼎のものが多く、規模の小さな墓葬では2鼎・1鼎が多く、傾向としては規模の大小と鼎の多寡が対応しているといえることができる。これは、短軸1.8mあたりを境に2鼎と4鼎の分布が変わるということもできよう。しかし、規模の大きな墓葬に鼎の少ない墓葬がないわけではなく、規模の小さな墓葬に鼎の多い墓葬がない。鼎の多寡は絶対的な優位性に置き換えることはできない。ただ、傾向としては、埋葬主体部C1、埋葬主体部C2の規模の大きい墓葬、埋葬主体部C2の規模の小さな墓葬という序列化ができそうである。

壁は、玉壁が埋葬主体部A・B・C1に限られ、陶壁・石壁は埋葬主体部Cに集中している(表2)。(9)材質の違いによって副葬される埋葬主体部に違いがあることから、埋葬主体部AからC2への優劣関係を確認することができる。また、埋葬主体部Aでは盗掘を受けながらも12件出土している。多量副葬がみられるのはこの埋葬主体部だけである。副葬件数からは、埋葬主体部Aの隔絶を確認する



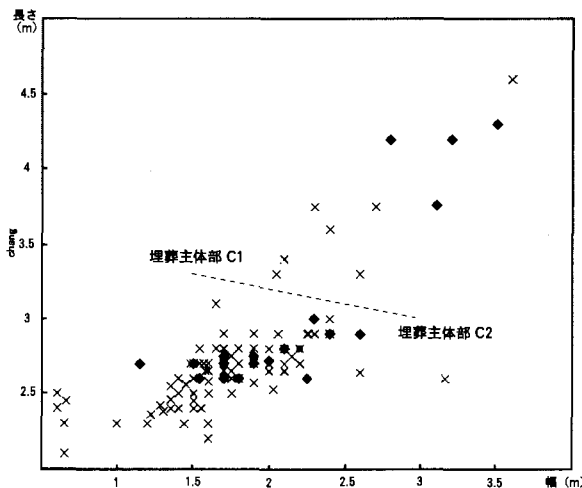
(◆9-6鼎 ■4鼎 ▲3鼎 □2鼎 △鼎 ×なし)

図 6-1 前漢前期の鼎の副葬状況



(■玉壁 ◆石壁 ▲陶壁 ◇琉璃壁 ×なし)

図 6-2 前漢前期の壁の副葬状況



(◆銅鏡 ■滑石鏡 ×なし)

図 6-3 前漢前期の鏡の副葬状況

ことができよう。それに、壁だけでなく他の佩玉を副葬するのもこの埋葬主体部だけである。埋葬主体部 C1 と C2 では壁の副葬がない墓葬があり、壁の副葬が同じ埋葬主体部の中でも優位性を示すのか否か確かめるべく、埋葬主体部の規模と壁の副葬の関係を示した(図 6-2)。まず、埋葬主体部 C1 では材質の如何にかかわらず、大半の墓葬で副葬されており、副葬率は高い。埋葬主体部 C2 では、石壁と琉璃壁・陶壁が副葬されているが、石壁は長軸が 2.5 m 短軸が 1.8 m 以上の規模の大きな墓葬でのみ副葬されており、石壁の副葬が埋葬主体部 C2 内における優位性を示す指標であるとみとめることができよう。ただし、規模の大きな墓葬には必ずしも石壁が副葬されているわけではなく、石壁の副葬も絶対的な優位性を示すわけではない。とはいうものの、副葬率から埋葬主体部 C1 の C2 に対する優位性、石壁の副葬の有無による埋葬主体部 C2 内における長軸 2.5 m 短軸 1.8 m を境とした規模の大きな墓葬と規模の小さな墓葬の間の優劣関係は認めることができよう。

鏡は、どの埋葬主体部でも副葬されているが、埋葬主体部 A・B では高い副葬率を示すのに対して、埋葬主体部 C1、C2 と、規模・構造が劣るにつれて副葬率も低下する(表 2)。鏡も壁と同じように、埋葬主体部 C1 と C2 に注目して、埋葬主体部の規模と鏡の副葬の関係を検討した(図 6-3)。まず、埋葬主体部 C1 であるが、鏡を副葬するのは規模の大きな墓葬に限られている。埋葬主体部 C2 でも、鏡の副葬は長軸 2.5 m 短軸 1.5 m 以上の墓葬に限られる。埋葬主体部 C2

では、石壁を副葬する墓葬よりはやや規模の小さい墓葬まで副葬がみられるようである。鏡についても、規模の大きな墓葬で副葬されるが、規模の大きな墓葬に必ず副葬されているわけではない。鏡の副葬からは、埋葬主体部 C1 の C2 に対する優位性をみとめることはできなかったが、埋葬主体部 C2 における規模の大きな墓葬の小さな墓葬に対する優位性はみとめることができた。

この他には、印章が埋葬主体部 A で玉印が出土するのみであり、鉄製利器は 30 cm 程度の書刀がどの埋葬主体部にも若干副葬されるだけで、特に特定の埋葬主体部に集中するようなことはない。また、この時期には、銅鼎や銅壺などの青銅製の容器が副葬されることもほとんどない。

前漢前期の副葬状況をまとめると、図 8 のようになる。大きくは、漆器の大量副葬により埋葬主体部 A・B と C1・C2 を区別することができる。壁や鏡はどの埋葬主体部でも副葬されるが、材質・副葬率によって、埋葬主体部 A・B、C1、C2 という序列を確認することができた。また、埋葬主体部 C2 に関しては、壁や鏡の副葬がある規模の大きな墓葬と副葬がない規模の小さな墓葬に、わけることができた。その境としては、おおそ長軸 2.5 m 短軸 1.5~1.8 m が目安となる。

#### 前漢後期 (表 3)

この時期には盗掘の及んでいる墓葬が多くなる。表 3 では埋葬主体部ごとに、盗掘の及んでいない墓葬と及んでいる墓葬を分けて示した。

漆器は、副葬形態としては複数副葬と単数副葬に分けられる。盤や耳杯など複数器種で複数副葬されるのは埋葬主体部 A・B・C に限られ、埋葬主体部 D では副葬がみとめられるものの、盒一件のみのことが多い。埋葬主体部 E では痕跡のみ、F では痕跡も確認されておらず、基本的に漆器の副葬は稀であったと考えてよいであろう。漆器の副葬からは、埋葬主体部 A・B・C→D→E・F という序列・優劣関係を見ることができる。

次に、青銅器の副葬に注目したい。鼎・壺をはじめとする青銅容器は、埋葬主体部 A から D までの墓葬でしか副葬されない。また、博山炉や灯などの調度具・供献具も、青銅製品が副葬されるのは、基本的に埋葬主体部 D までの墓葬である。また、鏡の副葬は埋葬主体部 E までである。青銅製の容器と調度具が埋葬主体部 D まで、鏡が埋葬主体部 E までという副葬状況から、埋葬主体部 A・B・C・D→E→F という序列・優劣関係を見出すことができる。

鶏血石・瑪瑙などの串珠は、埋葬主体部 A・C・D でみられ、基本的に埋葬主体部 E・F ではみられない。ここでも、埋葬主体部 D と E の間の隔たりをみることができる。

壁は埋葬主体部 F までの墓葬で副葬されるが、基本的には埋葬主体部 E までの副葬と考えてよい。材質に着目すれば、玉壁は埋葬主体部 C、琉璃壁は埋葬主体部 D に限られる。石壁はいずれの埋葬主体部でも出土する。埋葬主体部 A・B はいずれも盗掘・擾乱が及び、原状の副葬品組成を確かめることができないが、少なくとも埋葬主体部 C→D→E・F という埋葬主体部の規模の序列に、数量・材料が対応している状況である。

印章では、埋葬主体部 A で銀印が、埋葬主体部 D で銅印が、埋葬主体部 E で滑石印が出土しており、それぞれの埋葬主体部が社会的階層的な上下関係におきかえることができる可能性を指摘できる。鉄製利器では、剣・刀の長刃利器の副葬例が増える。埋葬主体部 A・B・C ではほとんどの墓葬に盗掘が及んでおり、それらからは鉄製利器の副葬は確認されていないが、盗掘の及んでいない

表3 前漢後期における副葬状況

埋葬主体部	墓葬名称	盗	漆器	銅器								珠	璧			印	鉄利器		陶鼎										
				鼎	壺	盤*	釜	博	盃	灯	鏡		玉	琉	石		刀	劍											
A	楊M401	盗	複	■	■						■	■	雞			銀			2										
B	伍M203	盗	複	■		■		■	*	■	■				1				4										
	陳M102	盗	複																										
C	伍M211	盗	痕	■	■	■		■		■	■	■	瑪水松 瑪	1	2		■		3										
	湯家嶺M1			■	■	■		■	■	■	■	■								■	6								
	伍M202				■			*			■									1									
	伍M259			■				*	*											1									
	伍M201					■	■	■		■																			
伍M218	盗	盗					■											1											
伍M226	盗	盗					*							1					2										
D	伍M240	盗	痕	■	■	■	■	*		■	■	■	瑪 雞玉	1	3		■		1										
	識M327			■	■	■	■	■	■	■	■	■								■	7								
	楊M304			■	■	■		■	■	■	■	■																	
	楊M405								*		■	■								■	雞玉琉	1	5	銅	■	■	2		
	伍M217								*		■	■								■		1	1		■	■	1		
	伍M245				■	■	■	*	*	■	■	■								■		1	1		■	■	2		
	伍M270							*	*		■	■								■		1	2		■	■	1		
	伍M225							*	*			■								■		1	2		■	■	2		
	伍M239			盗	痕					*	*																■	■	2
	伍M244			盗	痕						*																■	■	2
	伍M212			盗	痕					*																	■	■	3
	伍M256			盗	痕	■														■								■	■
陳M119	盗	痕																											
伍M219	盗	痕										雞																	
E	伍M265*	盗	痕									滑	石	6	9	滑	■	■	4										
	砂子塘M2									■	■	1								1	2								
	伍M267							*	*		■	1								1	2								
	楊M404							*	*			1								1	2								
	伍M241							*	*			1								1	1								
	伍M214										■									1	1	4							
	識M339																			1	4								
	識M334							*	*												2								
	伍M242			盗	痕					*	*										1								
陳M116	盗	痕					*				4																		
伍M235	盗	痕						*			1																		
F	識M312	盗	盗					*											5										
	伍M269																		4										
	桐M6																		2										
	識M357																		1										
	陳M109									■				2					3										
	伍M205			盗	盗															1									
	識M108			盗	盗					*										1									
伍M271	盗	盗										1			■	■	1												

- ・陳：陳家大山 伍：伍家嶺 識：識字嶺 楊：楊家大山 桐：桐梓坡
- ・漆器 複：複数出土 単：1件のみ出土 痕：漆皮や銅泡といった付属品のみ出土
- ・青銅器 盤：ここでは、盤・盆・洗として報告されるものをふくめた  
博山炉・盃・灯では、陶製のものを\*で示した
- ・珠 雞：鶏血石 瑪：瑪瑙 水：水晶 松：松緑石 玉：玉塊 琉：琉璃



墓葬ではいずれも刀を副葬する。埋葬主体部Dでは、ほぼ剣・刀が共伴しておりその副葬率も低くないが、埋葬主体部E・Fではそれぞれ一例のみである。鉄製利器でも埋葬主体部DとE・Fの違いが浮き彫りとなった。

なお、前期では埋葬主体部と対応関係をみせていた陶鼎は、該期にはいずれの埋葬主体部でも4件から1件程度であり、埋葬主体部との相関関係はみられない。

前漢後期には、漆器の複数副葬における埋葬主体部A・B・Cの優位性、青銅容器と調度具の副葬、串珠の副葬、玉・琉璃璧の副葬、鉄製利器の副葬による埋葬主体部A・B・C・Dと埋葬主体部E・Fとの序列・優劣関係が明らかとなった(図8)。

## ④……………被葬者集団の抽出と長沙前漢社会の階層構造

### 1) 被葬者集団の抽出

これまでの、埋葬主体部の規模と構造の分析と副葬品組成の分析から得られた状況をもとに、被葬者集団を整理して長沙地域の社会階層を抽出し、その集団間関係を考察してみたい。図7では埋葬主体部の規模と構造の分析から得られた埋葬主体部間の関係性を、図8では副葬品組成の分析から得られた埋葬主体部間の関係性を示した。埋葬主体部の上下の位置関係は、その規模の違い・共通性を反映して示した。前章1節でも指摘したように、前漢前期の埋葬主体部C2と前漢後期の埋葬主体部Fは、埋葬主体部の規模が同じであることから、上下の位置関係は並列して示している。ここでは、前漢前期と前漢後期に分けて、時期ごとに、埋葬主体部の規模と構造、副葬品の組成を総合して、埋葬主体部間の関係を整理しよう。

#### 前漢前期

埋葬主体部の構造では、黄腸題凑や玄門、或るいは棺埋葬空間前方の副葬品配置空間が特殊化するなどの特徴をもつ埋葬主体部Aと、副葬品配置空間の多寡はあるものの構造的に均質な副葬品配置空間が棺埋葬空間を圍繞する埋葬主体部B以下の墓葬には構造的な差異がある。副葬品では、漆器の副葬、璧・鏡の副葬の二つを指標として、埋葬主体部AとB、埋葬主体部C1とC2の規模の大きな墓葬、埋葬主体部C2の規模の小さな墓葬に分けることができる<sup>(10)</sup>。これらを総合すると、前漢前期には、埋葬主体部Aパターン、埋葬主体部Bパターン、埋葬主体部C1とC2の規模の大きな墓葬のパターン、埋葬主体部C2の規模の小さな墓葬のパターン、という4つの埋葬行為を見出すことができる。そして、埋葬パターンの共通する各墓葬の被葬者達を被葬者集団として認識することができる。これら4つの埋葬パターンに規定される被葬者集団を、Aランク(埋葬主体部A)、Bランク(埋葬主体部B)、Cランク(埋葬主体部C1とC2の規模の大きな墓葬)、Dランク(埋葬主体部C2の規模の小さな墓葬)として、序列・優劣関係にある社会階層としてみとめることができよう(図9)。

#### 前漢後期

埋葬主体部の構造では、副葬品配置空間が直線配列か圍繞配列かによって、埋葬主体部A・Bと

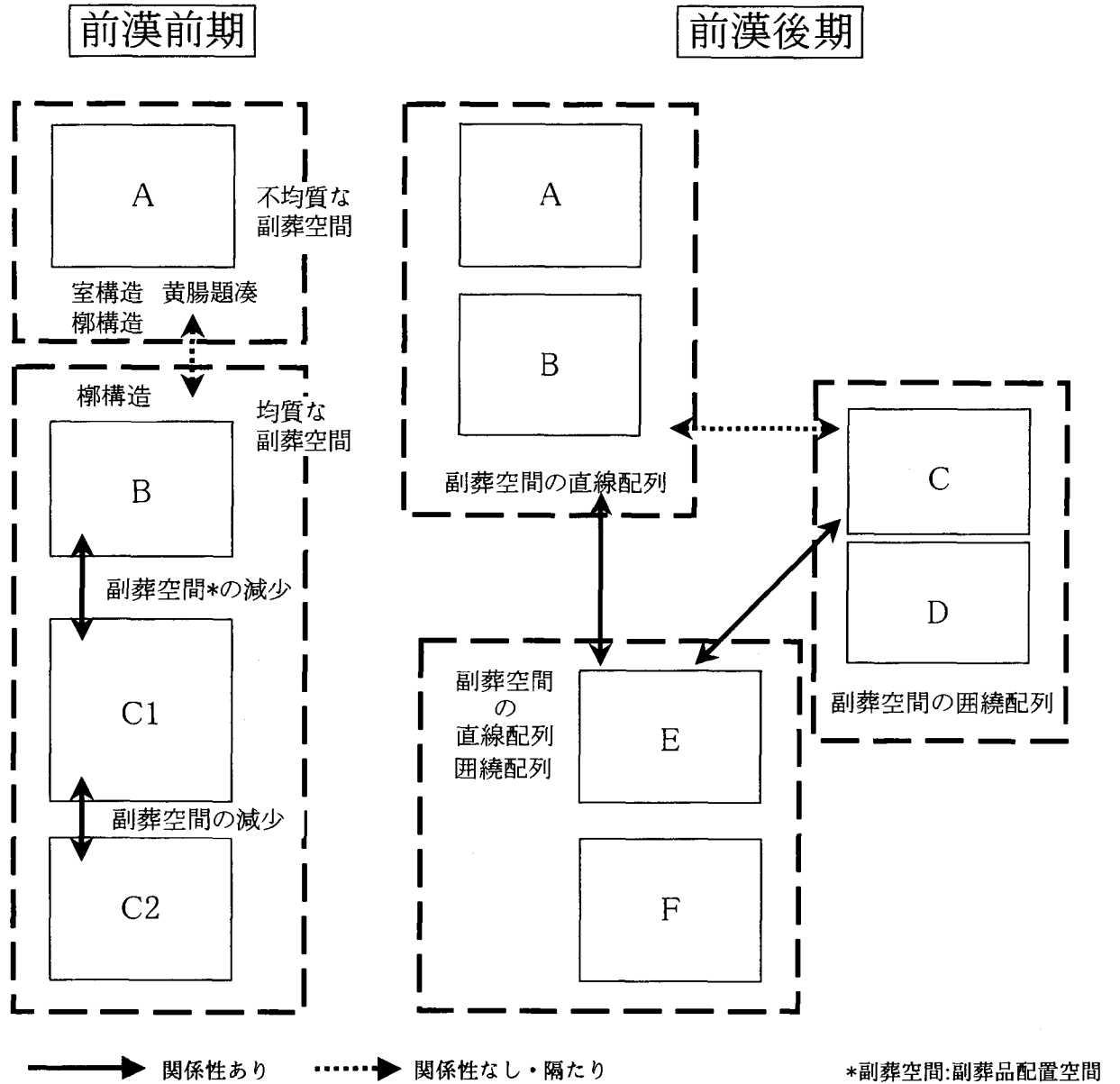


図7 各埋葬主体部の規模と構造

C・Dが区別できた。埋葬主体部Eでは、直線配列も圍繞配列も存在し、埋葬主体部A・BとC・D両者との関係性が指摘できた。副葬品の組成では、漆器、青銅器（容器・調度具）、串珠等の副葬、鉄製利器の副葬、壁と鏡の副葬を指標として、埋葬主体部A・B・C・D、埋葬主体部E、埋葬主体部Fの3つに分けることができる。漆器の副葬は、複数副葬と単数副葬によって、埋葬主体部A・B・Cと埋葬主体部C・Dに分けることができた。これらを総合すると、埋葬主体部A・Bパターン、埋葬主体部C・Dパターン、埋葬主体部Eパターン、埋葬主体部Fパターン、という4つの埋葬パターンを見出すことができる。前漢前期と同じ視点で、これら共通する埋葬パターンに規定さ

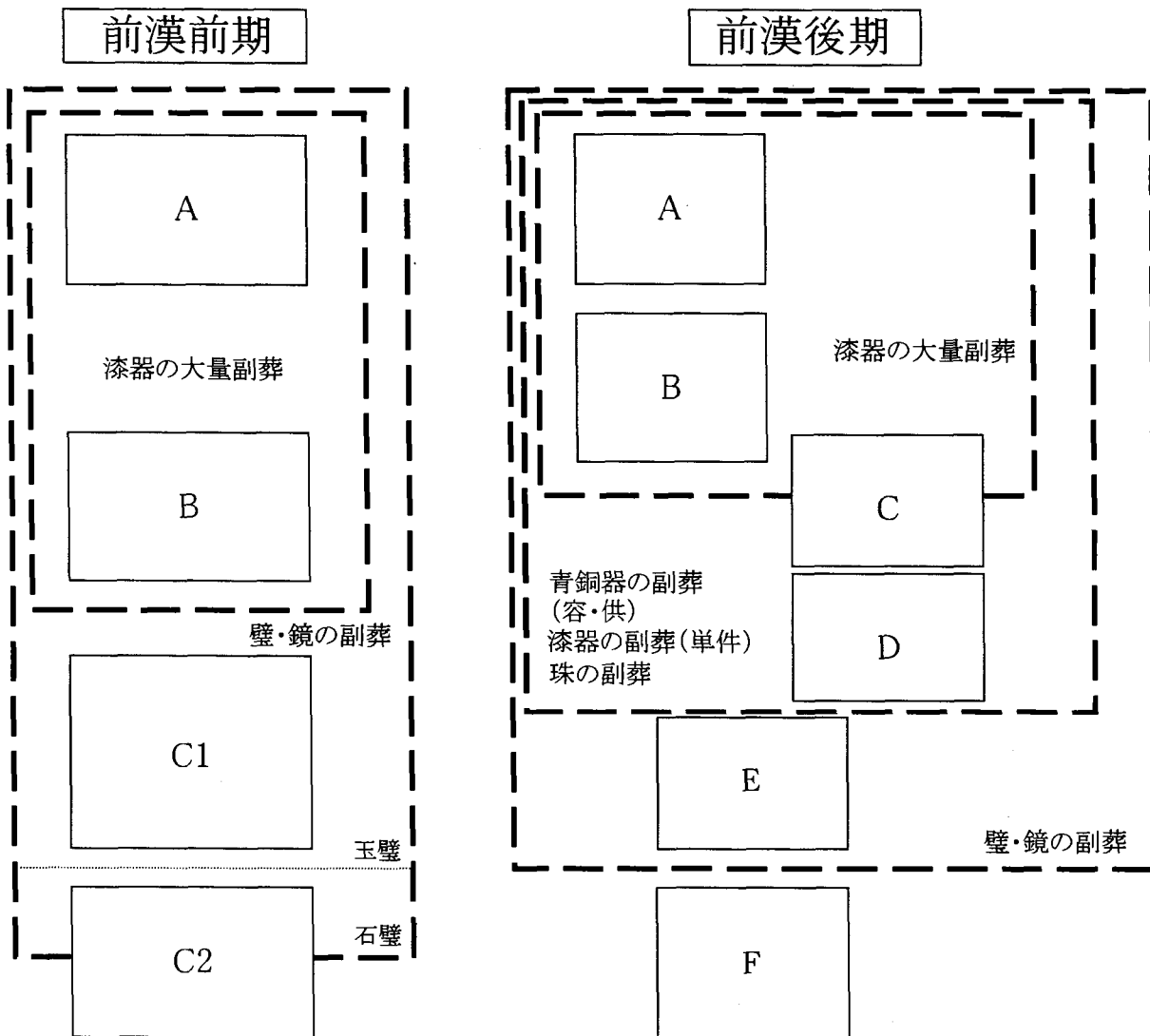


図8 各埋葬主体部の副葬品組成

れる被葬者達をひとつの社会的な階層として認識し、それぞれAランク（埋葬主体部A・B）、Bランク（埋葬主体部C・D）、Cランク（埋葬主体部E）、Dランク（埋葬主体部F）とした（図9）。

次に、前漢前期の4階層と、前漢後期の4階層の関係性について検討してみよう。ここでは、出土文字資料によって被葬者の社会的地位・階層が判明しているものを援用しながら論を進めてゆきたい。副葬品組成では、前漢前期と前漢後期ともに、漆器の副葬と璧・鏡の副葬が埋葬パターンの違いの指標となっており、それぞれの階層における埋葬パターンは、前期と後期で大きくは共通している。もっとも、前漢後期には青銅器の副葬が顕著となり、埋葬パターンの指標となるなど、前期と後期で全く同じというわけではない。それに、埋葬主体部の構造は同じではないが、その規模

はそれぞれの階層ごとで近似する。

副葬品組成と埋葬主体部規模という2つの要素が類似することから、前期と後期の階層の関係性のある程度は指摘することができる。副葬品の組成が共通するだけでは、同じ社会階層であるとは決められない。特定副葬品の社会的価値が変化し、埋葬パターンに取り入れる社会的階層が変化する可能性もあるからである<sup>(1)</sup>。しかし、埋葬パターンを支える要素の2つが共通していれば、同じ階層である可能性は高いと考えられる。

まず、下位のランクからみてゆこう。前漢前期のDランクと前漢後期のDランクは、ともに埋葬主体部の規模は同じであり、特定の副葬品を持たない。埋葬主体部の規模と副葬品組成という2つの要素が共通することから、両者に関係性がある可能性は高い。また、前漢前期のCランクと前漢後期のCランクも、墓葬の規模がほぼ同じであり、特定の副葬品としては石壁と鏡を副葬しており、両者が同じ階層であった可能性は高い。次にBランクにおいて、Aランクをみてみよう。この階層は、副葬品組成において、どの指標もすべて満たしており、埋葬主体部の規模・構造においても最上位に位置付けられ、両者は関係性があると思われる。前漢前期のAランクでは外護施設がみられ、これが文献に記載された天子諸侯王功臣に許されたと記載された「黄腸題凑」である可能性が高い。陡壁山1号墓では

「長沙后丞」封泥が出土しており、被葬者が長沙王后であると考えられている。前漢後期のAランクの埋葬主体部Aである楊家大山401号墓から「劉驕」銀印が出土しており、被葬者が前漢後期の劉氏長沙王とかかわる人物である可能性が極めて高い。Aランクは長沙王もしくは王族などを含む上位の社会階層に帰することができよう。Bランクでは、前漢前期の埋葬主体部Bと前漢後期の埋葬主体部C・Dは、埋葬主体部の規模はほぼ同じであり、ともに壁・鏡の副葬条件を満たし、漆器を

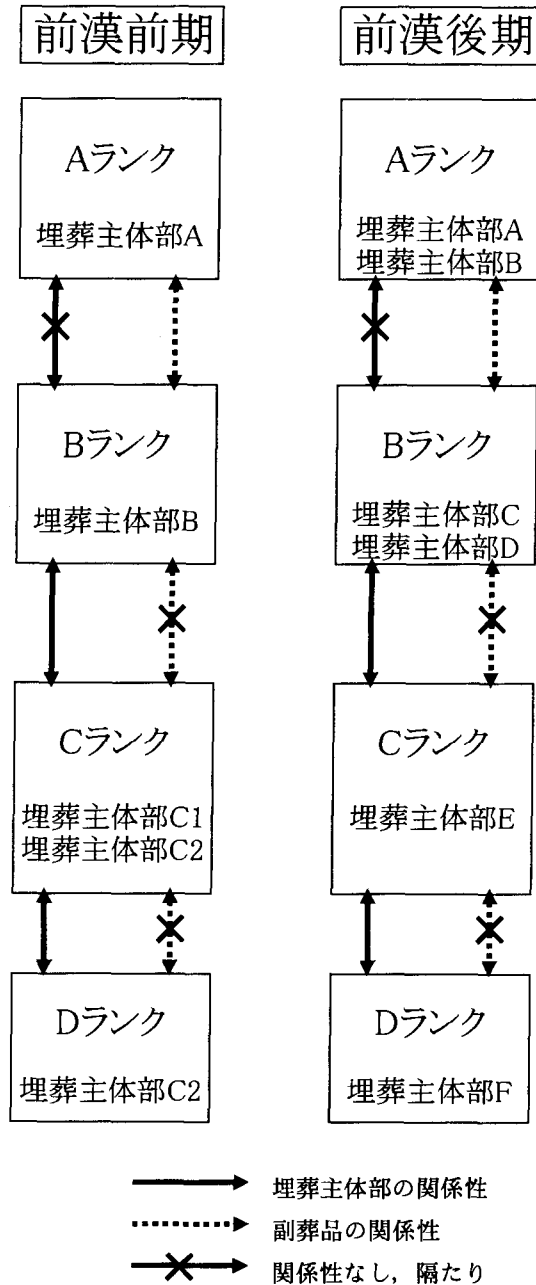


図9 前漢長沙地域の社会階層と集団間関係

副葬するなど共通する点がある。前漢前期の埋葬主体部Bと前漢後期の埋葬主体部Cは同じ階層である可能性は高い。しかし、前漢後期の埋葬主体部Dでは、漆器の副葬は単数副葬であることから、これらよりは若干階層的に下位に位置付けられる可能性がある。この仮定に従えば、前漢前期から後期にかけて、Bランクが階層分化し、上位階層に対応した埋葬パターンと下位階層に対応した埋葬パターンが出現したといえることができる。ただ、Bランクの階層がそのまま階層分化したのか、Bランクより下位のCランクの一部が階層的に成長した結果この階層が出現したのについては、検討を要する。

## 2) 長沙における階層構造

前節の考察から、前漢前期の各階層と前漢後期の各階層は、前漢前期のBランクでは前漢後期にやや多様化するものの、ほぼ同じ階層に帰して考えることができた。ここでは、戦国期から前漢後期まで継続して墓群が営まれた長沙伍家嶺地区を対象に、集団内における階層の変化を検討してみたい。『長沙発掘報告』に記載されている長沙伍家嶺地区には、北北東から南南西に細く伸びる南北二つの丘がある<sup>(12)</sup>。南丘北丘の東には、北北東に細長く開口する浅い谷上の地形をなす。墓葬は、北丘の西斜面と南斜面、南丘の平坦面と南斜面、西南斜面で検出されている。そして、南丘の東南斜面から谷を挟んだ向かいの斜面（以後「向斜面」と呼ぶ）にも墓葬は存在する。ここでは、前漢前期の墓葬の連続性をみるために、戦国期の墓葬の状況もあわせて示した<sup>(13)</sup>。

まず、前漢前期と前漢後期の状況をそれぞれみてみよう。前漢前期には、この地区では墓葬は少なく、C・Dランクの墓葬しかない。Cランクの埋葬主体部C1は南丘の平坦面に位置しており、ランクの高い墓葬が地理条件の良好な場所に位置する状況をうかがえる。前漢後期には、墓葬が増え、AランクからDランクまでの多様な墓葬がみられる。南丘の平坦面から南斜面にかけての墓群の構成が特徴的である。南丘平坦面には、Aランクの埋葬主体部Bが2基あり、これを中心にBランクの埋葬主体部C・Dが取り囲む。埋葬主体部CはAランクの墓葬に近く、その外周を埋葬主体部Dが取り囲んでおり、同じBランクの墓葬でも、Aランクの墓葬に対する位置関係は異なる。南丘の南斜面では、Bランクの埋葬主体部Dの更に外側にCランクの埋葬主体部Eが位置する。階層の高いものから低いものへ、南丘の平坦面から斜面へと、平坦面にある2基のAランクの墓葬を中心に、階層差と距離を相関させて、墓群が構成されている。この墓群と接して、南丘南西斜面でも墓葬が密集した一群がみられるが、ここでは、Bランクの埋葬主体部DとCランクの埋葬主体部EとDランクの埋葬主体部Fで一群が構成されている。そのさらに南西の斜面（図10では左下隅、以後「南西斜面」と呼ぶ）では、Bランクの埋葬主体部C・DとDランクの埋葬主体部Fによって一群が構成されている。このようにみると、前漢後期には、Aランクの階層を中心としたCランクまで及ぶ大規模な主群と、Bランクの階層を中心とした小規模な支群が存在することがわかる。有力者（家族）を中心としたいくつかの集団が存在し、その集団をより有力な人物（家族）を中心に統合した集団が、前漢後期の伍家嶺地区の墓葬からは想定できる。兆域を共有するこれらの集団がどのような紐帯で結ばれていたのかについては、漢墓資料からはこれ以上語ることはできない。推測の域ではあるが、これらの集団から具体的に思い起こされるのは、「経済的には独立した生計を営む貧富様々な同姓の家々（宗族）が、その中の有力な家（経済的には大土地所有者）を中心に結合し、そうした

同姓的結合を中核として、郷里における他の異姓の戸に対しても大きな社会的規制力を及ぼす土着勢力」としての豪族の姿である〔重近1998〕。

次に、各墓群における継続性についてみてみたい。前漢後期の南丘平坦面の主群は、突如出現した感が強い。前漢前期に平坦面には1基のみ確認されるだけである。しかし、該期この地域で最もランクの高いCランクの埋葬主体部C1がここに占地しているのは、前漢後期にAランクの被葬者を中心とした大墓群が形成されることとなんらかの関連があると考えられる。ここでは、南西斜面と向斜面に注目したい。南西斜面では、戦国時代から前漢前期、前漢後期ともに一定数の墓葬がみられ、継続して墓葬が造営されたと考えられる。前漢前期にはC・Dランクの墓葬しか存在しないが、

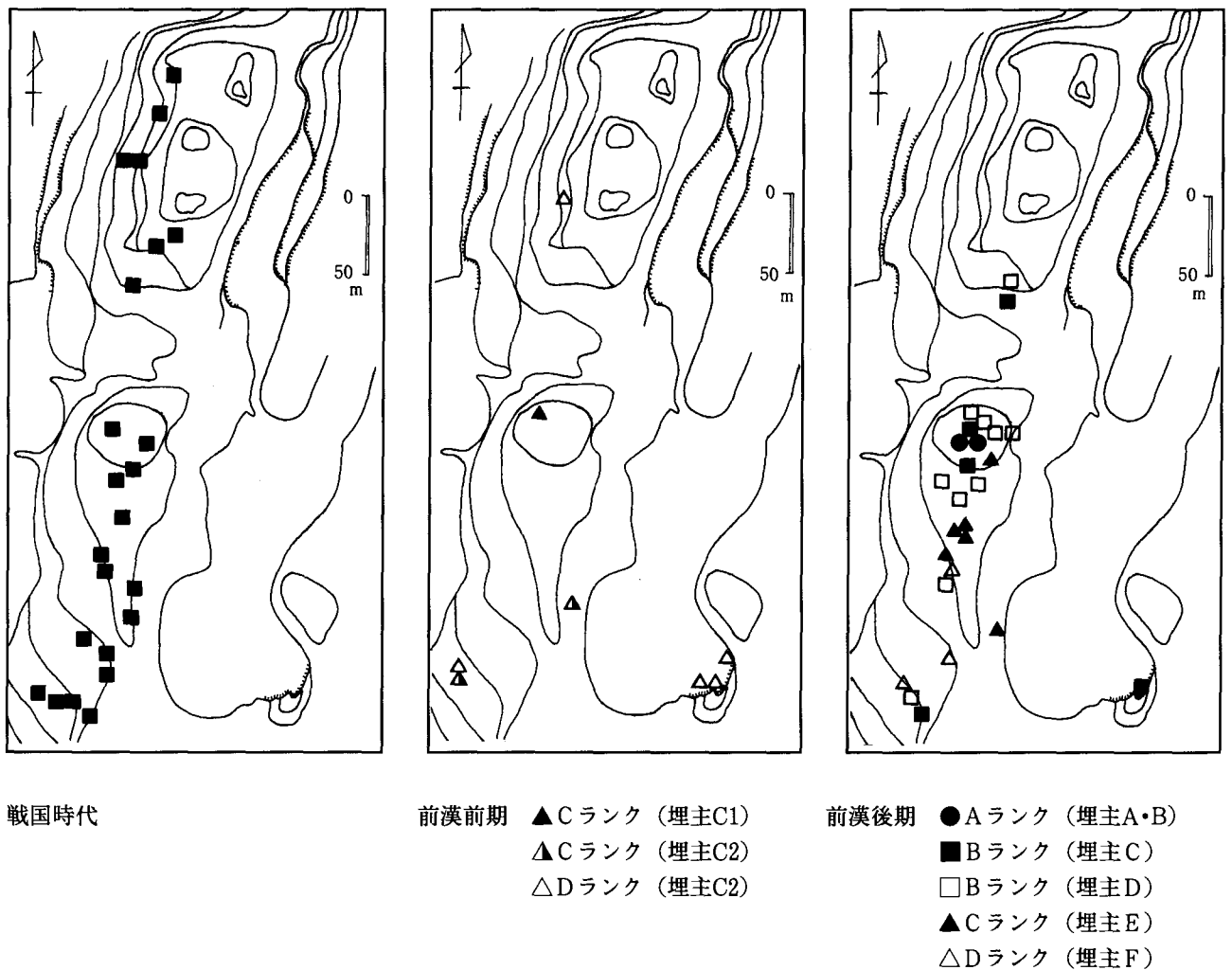


図10 長沙伍家嶺地区における墓群の変遷

前漢後期にはB・Dランクの墓葬で墓群が構成される。この墓群の中心となるBランクの被葬者は前漢前期にはC・Dランクにあった集団から輩出されたことがわかる。これは、向斜面でも同じであり、前漢前期にはDランクの墓葬のみであるが、前漢後期にはここにBランクの被葬者が埋葬主体部Cの墓を造営する。ここでも、前漢前期のDランクという下位の階層から前漢後期のBランクの階層が輩出されたことを想定することができる。南西斜面と向斜面では、前漢前期のC・Dランクの下位の階層から、前漢後期のBランクが輩出された可能性が強いことがわかった。これは特定地域に、一定数の墓葬が各時期ごとにみられることを同一集団の継続的な墓群の造営とみなした前提に基づいた考察である。

## おわりに

これまで、埋葬主体部の規模と構造、副葬品の組成をもとに、長沙地域の漢墓を分析し、埋葬行為（パターン）の違いから、4つの階層を抽出することができた。規模のみに頼らずに、また詳細な情報を有する墓葬を代表例として扱うことなく、多角的な視点から、できるだけ客観的に階層を抽出することができたと考える。また、前漢後期には、AランクやBランクなどの上位・中位階層で、より細分・多様化の様相がうかがえたが、基本的には前漢前期と前漢後期では、各階層は関係性があることがうかがえた。そして、この多様化するBランクが伍家嶺地区では、Aランクを中心とする大墓群を支え、その周辺の墓群の中核となるのである。いわば地域社会における中核的な存在として、Bランクを位置付けることができる。これは、あくまでも伍家嶺地区の例でしかないが、この階層の顕在化こそ、前漢後期社会の特徴ではないだろうか。これらの階層が、前漢前期のCランクやDランクにから輩出され、彼らが社会階層的に成長してきたことも、墓群の継続性からうかがうこともできた。このような視点で中国国内の漢墓を整理した検討は少なく、これを第一歩と位置付けて、今後、漢墓の整理をこころみたいと考えている。本稿は長沙国地域の整理の端緒として長沙地域の整理を目的としたのであるが、長沙国地域での様相を検討することが当面の課題であると考えている。また、今回は、漢墓資料を埋葬主体部と副葬品の組成など多角的に分析し、より具体的に動的に現象を描出し、検討することに重点を置いたため、分析・検討を経て得られた認識がこれまでの文献史学の成果とどのような関係にあるのか、どのように評価できるのか、紙面の都合もあり、検討するまでには至らなかった。漢墓資料から階層性に規定される集団を抽出したが、それを形成し変容させた要因を検討することで政治的あるいは経済的側面を含めた社会史的なアプローチも可能となるであろう。これら残された課題に取り組むことを望みつつ稿を終えることにしたい。

本稿は、日本中国考古学会関東部会において、2002年7月に発表した内容を発展させたものです。飯島武次、大貫静夫、小沢正人、吉開将人、大島誠二、黄川田修の各氏からは貴重な御意見をいただきました。この場をかりて、御礼申し上げます。

## 注

(1) — 構造・副葬品・装飾などの漢墓資料のどの側面に注目するかによって、把握できる集団は異なる。例えば、使用という側面に注目すれば「被葬者集団」を見出すことができるし、製作という側面に注目すれば「製作者集団」を見出すことができる。

(2) — 町田章は、「政府がなんらかの形で造墓に介入する王侯貴人の墓を大墓といい、そうでないものを中小墓という」と大墓と中小墓を定義している[町田 1977]。このように、大型墓・中型墓・小型墓を明確に定義した論考は少ない。

(3) — 仮に、Aという構造でBという副葬品の組合せをもつ墓葬に被葬者が生前に郡太守の地位であることが記されていた場合、構造Aと副葬品組合せBが郡太守という社会階層の代表的な例として、基準資料になる。しかし、果たして郡太守という階層に構造A・副葬品組合せBが一般的かどうかは、検討を要する。ある集団から郡太守は輩出されたのであり、その集団の把握こそ重要であろう。

(4) — ここで、埋葬主体部と墓葬という語について、説明しておきたい。「埋葬主体部」とは、棺を埋葬したり副葬品を配置したりする空間で構成される「はか」の中心構造を指すこととする。それに対して、「墓葬」とは、墓道やその他「埋葬主体部」に付帯する施設をふくめたものとし、一般的な「はか」という意味で用いることとする。

(5) — 仮に、報告書における埋葬主体部の分類型式がすべての墓葬について付記されていたとしても、そのまま型式を変換するというわけには行かない。新たにおこなう分類の基準となる属性が報告書における分類の基準となる属性と異なれば、平面図の掲載されていない墓葬については、新たにおこなう分類での位置付けを与えるのは不可能である。これは、埋葬主体部に限った話ではない。他の副葬品の再分類についても言えることである。

(6) — すべてが、貨幣のみを指標として年代が決定されているわけではないが、その他の副葬品およびその組成が貨幣の変遷とおおよそ一致していることから、貨幣が年代決定の大きな指標となっている。しかし、貨幣を指標とした年代決定では、例えば五銖銭が出土しないために武帝期元狩五年以前であるとされた墓葬が、武帝期元狩五年以後の墓葬で五銖銭を副葬していない可能性も否定できないのである。事実、長沙地域ではすでにその問題点が指摘されており、陶器の型式分類と貨幣などその他の副葬品の組合せによって編年案が提示されている

[宋 1984]。

(7) — [黄 2000]では両者の構造的類似性を指摘しながらも、象鼻嘴1号墓は二重の門構造をそなえ、墓道への開口意思が明示され、棺埋葬空間をとりまく回廊状の副葬品配置空間はそれぞれの空間が扉門によって相互に通行の可能となっていることから室構造であるとし、陡壁山1号墓は墓門が墓道へ開口せず、副葬品配置空間には扉門がなく各空間は完全に密閉された空間であることから、槨構造であるとしている。ただ、[黄 2000]での槨と室の定義では(p17)、この両者を区別するのは難しいように思われる。

(8) — 棺埋葬空間と副葬品配置空間の構成からみた埋葬主体部構造の復原は、あくまでも発掘調査で検出された副葬品の配置状況からの推定であり、盗掘などの擾乱の影響があるものについては、現状がどこまで原状を反映しているか判断できないものもある。それらをふまえた上での、現状からの推定である。

(9) — 滑石壁・石壁・料壁などと報告されるものをこれに含めた。

(10) — 玉壁の多量副葬や、多様な佩玉の副葬など、数量やヴァリエーションなどからすれば、埋葬主体部AとBも分けることができる。また、埋葬主体部C2の規模の小さな墓葬とは、前章での壁・鏡・等の副葬品組成の検討から、短軸1.5~1.8mを境としてそれよりも規模が小さいものであるということになる。絶対的にここで線を引くことは難しいが、埋葬主体部C2において規模がこの条件を満たしており、かつ鏡や壁を副葬しない場合はDランクとみなすことにする。

(11) — 下位階層が上位階層の要素を積極的に受容することにより、その要素・物質文化は社会的な価値を変容することがありうる。「階層性が社会の基本原則として発達し、このような階層性のなかで人や集団の階層を象徴するものがある場合、下位階層は上位階層がもつ物質的特徴、あるいは様式を積極的に受容し、上位階層に帰属しようとする社会戦略をとるが、下位階層がそれを受容したときはすでに上位階層はさらに新しい象徴物を導入しているため、階層間の序列は従来どおり維持されるものである」([高久 1994]より引用)と説明されるエミュレーションプロセスである。

(12) — 図10では、[中国科学院考古研究所編 1960]に掲載された地図をそのまま用いた。等高線の状態など、地図としては問題のある地図であるが、起伏など地勢を読み取ることはできる。また、この報告後これら湘江東



岸の諸地域では、発掘事例が増加したが、それらを地図上に落とすことは極めて困難であり、この報告段階での状況に基づいて分析を進めた。

(13) — 戦国時代も、ひとくくりにできるものではなく、階層・時期を細分して検討しなければならないが、本稿の主旨からは外れるので、墓の位置を示すにとどめた。

## 参考文献

### 日本語文

- 五井直弘 1970「後漢王朝と豪族」『岩波講座 世界歴史4 東アジア世界の形成I』  
 黄 曉芬 2000『中国古代葬制の伝統と変革』勉誠社  
 重近啓樹 1998「秦漢帝国と豪族」『岩波講座 世界歴史5 帝国と支配』  
 高久健二 1994「楽浪墳墓の埋葬主体部—楽浪社会構造の解明—」『古文化談叢』第35集  
 町田 章 1968「漢河南県城墓考」『考古学雑誌』第54巻第2号  
 町田 章 1974「漢代南越国墓考」『東方学報』第46冊  
 町田 章 1977「華北地方における漢墓の構造」『東方学報』第49冊  
 山下志保 1991a「漢代画像石墓の構造と変遷」『古文化談叢』第25集  
 山下志保 1991b「画像石墓と後漢時代の社会」『熊本大学文学部論叢』第37巻

### 中国語文

- 黄展岳 1998「漢代諸侯王墓論述」『考古学報』1998年第1期  
 吳曾德・肖元達 1985「就大型漢代画像石墓形制論“漢制”—兼談我國墓葬的發展過程」『中原文物』1985年3期  
 湖南省博物館 1963「長沙沙子塘西漢墓發掘簡報」『文物』1963年第2期  
 湖南省博物館 1965「長沙南郊砂子塘漢墓」『考古』1965年第3期  
 湖南省博物館 1966「長沙湯家嶺西漢墓清理報告」『考古』1966年第4期  
 湖南省博物館 1973『長沙馬王堆1号漢墓』文物出版社  
 湖南省博物館編 1979『馬王堆漢墓研究文集』湖南出版社  
 湖南省博物館 1981a「長沙象鼻嘴一号西漢墓」『考古学報』1981年第1期  
 湖南省博物館 1981b「長沙楊家山304号漢墓清理簡報」『考古学集刊』第1集  
 宋少華 1984「試論長沙西漢中小型墓葬的分期」『湖南考古輯刊』第二集  
 宋少華 1985「略談長沙象鼻嘴一号漢墓陡壁山曹孃墓的年代」『考古』1985年第11期  
 中国科学院考古研究所編 1960『長沙發掘報告』科学出版社  
 長沙市文化局文物組 1979「長沙咸家湖西漢曹孃墓」『文物』1979年第3期  
 長沙市文物工作隊 1986「長沙西郊桐梓坡漢墓」『考古学報』1986年第1期  
 博學有 1999『中国歴史暨文物考古研究』岳麓書社出版社  
 俞偉超 1985「周代用鼎制度研究」『先秦兩漢考古学論集』文物出版社  
 俞偉超 1981「馬王堆一号漢墓用鼎制度考」『馬王堆漢墓研究』湖南人民出版社  
 俞偉超 1985「漢代諸侯王与列侯墓葬的形制分析—兼論“周制”“漢制”与“晋制”的三階段性—」『先秦兩漢考古学論集』文物出版社

### 図版出典

- 図3-1 長沙市文化局文物組 1979：図2  
 図3-2 湖南省博物館 1973：図4と図36を合成  
 図3-3 中国科学院考古研究所編 1960：図57  
 図3-4 長沙市文物工作隊 1986：図7  
 図3-5 中国科学院考古研究所編 1960：図58  
 図3-6 長沙市文物工作隊 1986：図3  
 図3-7 長沙市文物工作隊 1986：図10  
 図4-1 中国科学院考古研究所編 1960：図66  
 図4-2 中国科学院考古研究所編 1960：図73  
 図5-1 湖南省博物館 1966：図1  
 図5-2 中国科学院考古研究所編 1960：図68  
 図5-3 中国科学院考古研究所編 1960：図69  
 図5-4 中国科学院考古研究所編 1960：図70と図71を合成  
 図5-5 中国科学院考古研究所編 1960：図64  
 図5-6 湖南省博物館 1965：図1  
 図10 中国科学院考古研究所編 1960：図版105をもとに作成

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

(2003年3月3日受理, 2003年5月9日審査終了)

## **The New Horizon of Research Using Materials on Han Tombs : Using Early Han Society of the *Changsha* Region as a Model**

UENO, Yoshifumi

One major challenge in the archeological approach to materials on Han tombs has been the attempts to use materials on Han tombs to construct burial practices, extract groups of people buried from the differences in practices, and to examine social dynamics from the relationships between these groups and changes thereof. Discovering and understanding social structure within the Han Dynasty is also important from the perspective of considering trends in the nearby regions of East Asia. As one specific example of this kind of analysis, the study outlined in this paper focuses on the Changsha region(長沙) from the Western Han period. The various attributes of Han tomb materials such as the scale and structure of the main burial areas and the composition of funerary accessories, are examined from various perspectives in order to reconstruct burial practices and extract the groups of people who were buried. This has resulted in the discovery of four classes in both the early and late periods of the Western Han period. It became clear that these four classes correspond roughly to the early and late periods of the Western Han period and that there was diversification within the classes during the late period. It was also possible to deduce the social structure in the Changsha region during the late Western Han period from the composition of tombs in the late period. This research has made it possible to use materials on Han tombs to build a bridge to an approach for studying the social structure of Han society.